

第一章

【第一報】

0.



三千世界を切り取れなくなった私の目に、手に、心に、世界の無価値が侵食していくの。あれだけ嫌悪し続けて、ファインダーの外に追いやってきた醜悪さが、息をするたびに清浄を奪っていく。いつの間にか定義を根こそぎひっくり返して私と同一化を図ってきたかのように、焦げ付いた泥は私に及んでいたの。

ううん、ダメだわ。単純な語彙ではあんたに敵わないな。やめておく。

視界を根絶やしにしてしまった今でも——いや、今まで以上に言葉は生まれる。皮肉にも、作業台の前で真剣に新聞制作と向き合ってきた今までではなかったほどに、吐き気のような言葉が溜まっているのがわかるの。文量だけなら、落葉の季節から厳寒までを越すだけの量でも揃えることができると思う。

でも、違うんだ。

もう、私が紡げると、私しか紡げないと信じてきた、幻想郷の美しさを切り取る言葉は死んで、陳腐しか、漏れ出てこない。

結構頑張ったんだけどな。私。

ブン屋を始めた当初から自信があつただけだな。

——この幻想郷は、あなた達が勝手に失望しているほど、「終わった」世界じゃない。

私が、どうにか出来ると思つた。

切り出すことができると思つた。

作られた歪な平和に不信を抱いて囚われてしまった人たちに、それでも世界は美しいんだと、再び齒向かう力を与えてあげるぐらいのことはできると過信していた。

どうしてだろう。

どうして何も達せなかつたんだろう。

私の世界との向き合い方、間違つてたのかな。

信念に強度が足りなかつたのか。

それとも、才能を飼い殺してしまつたのか。

才能に食い殺されたのか。

——才能なんて名の化物は、もともといなかつたのか。

……苦しくなってきたなあ。

ファインダーの中も、もう見えないし。

ねえ、はたて。まだそこにいるのよね。

あんたは自分の箱庭に潜って、真理を孤独に構築することが好きな箱入り娘だったけど、そこに、答えはあった？

私が向き合った世界には、答えがあったと思う？

私の失望は早計だったんだと、代わりに答えを導いてくれる？

——血の涙を流す彼女であっても、天狗の生命力と月の名医の腕を掛け合わせれば、とすれば助かったのかもしれない。だけど、その「もしも」は、検討する余地もなく後悔の材料にするにも弱く、今に至っても本気でその分岐先を思うことはない。

私は、鉄分の臭いとともに失望を吐露する彼女を、立ち尽くしたまま見下ろしていた。彼女は、鼻をすすっていた。赤く細い線が鼻の下で合流する。そのあたりを無計画に手の甲でなでつけるので、彼女の顔はぐちゃぐちゃになってしまっている。赤くない、本当の涙も流していたのかもしれない。ただ、どちらにしても、慰めて欲しい、わけではなさそうに見える。だけど、問いに対する答えだけは切に欲していることだけは確かなようだ。

そんな彼女を見下ろしながら、私はこめかみの側を垂れ下がる髪の毛をくるんくるんと弄んでいた。右手には私の同体であるケータイが握られているので、左手の二本指で、くるんくるん。そういえば枝毛の手入れとかここ最近意識してないな、とか、そんなことを考えていた。

端的に言つて、どうでも良くなつてしまつたのだ。

彼女は、私の羨望の対象だつた。

だけど、彼女は諦めてしまつた。

その瞬間、彼女は、私の中の切り捨てるべき人格と重なつてしまつたのだ。

敗者の弁は、なおも続いた。

それでも私は、髪先のキューティクルを気にし続けた。

——彼女からは、もう、何も生まれれない。

私の世界の材料にさえなり得なくなつた彼女に、興味はなくなつていた。

ただひとつ。私を得た有益な情報は、彼女が向き合つてきた幻想郷に、内面世界に、彼女の求める真実はなかつたのだという、行き止まりの情報だけだつた。